

滋賀県近世社寺建築の調査（2）

建築物研究室

1983年度から2年計画で行っている滋賀県近世社寺調査第2年度目の1984年度は、主に県の北半部を対象として調査し、2カ年あわせて県全域の調査を完了した。本年度の調査棟数は、二次調査が137件187棟、一次調査が24棟、昨年度を合すると422棟の多数に及んだ。調査建物の全般的傾向は昨年度と異なるものではないが、いくつか地域的・宗派的特徴がみられる。

神社本殿は流造、特に向拝付き三間社の多いのが県下全般の傾向であるが、県北半部では、屋根を複雑にするもの及び方三間入母屋造社殿が多くみられる。前者は唐破風や千鳥破風を付加して屋根を飾る。後者は仏堂とは形態上差がなく、事実かつては仏堂であったのを神仏分離後に社殿とした例がある。いずれも江戸時代後半の遺構が多い。綿向神社本殿（日野町・宝永4年）はこれら二つの特色を兼ね備えた古い遺構の一例である。八幡神社本殿（愛知川町・寛文8年）は軒唐破風附流造本殿では珍しく県南部に位置する。大坂の大工の作と考えられており、摂津の遺構と共通する意匠が注目される。拝殿では方三間入母屋造が通例であるが豊満神社拝殿（愛知川町）は桁行七間の横長平面で、柱・頭貫・木鼻に中世の部材が多く混る。筑摩神社拝殿（米原町・文政3年）は方三間ながら、中央方一間の内側の柱上を三手先詰組斗拱で派手に飾る。化粧屋根裏・格天井を張るだけの変化に乏しい県下の拝殿では特異である。中世の社殿として貴船神社本殿（マキノ町）、日吉大宮神社本殿（寛政年間の改造あり）・思子淵神社社殿（3棟）（いずれも朽木村）を新たに見出した。

寺院については浄土真宗が圧倒的多数を占めるが、県北部では永平寺との関係もあってか曹洞宗寺院が多くなり上質の仏堂や整った伽藍を備えるものがある。

中世仏堂遺構の多い天台宗寺院については、近世に入っても中世の伝統をひく本堂が多く見られる。葛川明王院本堂（大津市・享保2年）は、孫庇と外陣を一体の空間とし、内外陣の架構に見るべき点が多く、細部の技法・意匠には過渡的要素がみられる。しかも『門葉記』所収の中世の平面にも酷似する点は興味深い。百済寺本堂（愛東町・慶安3年）は、平面構成としては西明寺・金剛輪寺等近辺の中世仏堂を継承するが、虹梁を殆ど用いず格天井を一面にはり、外観正面中央間を軒唐破風で飾るのみで、中世仏堂の変化に富む架構・細部の面白さはない。ここに同じ天台宗寺院本堂でも中世と近世の本質的な差が現われている。天台宗の本堂として、常行堂の三間四面の平面を踏襲しつつ内部を内外陣にわけける例がみられる。こうした範疇の中で観音寺本堂（山東町・正徳5年）が重要な遺構である。平安時代以来伊吹山麓に散在する寺社の中心的地位を占めた当寺の本堂は、頭貫は虹梁形とし、須弥壇前の桁行には龍の丸彫彫刻の火頭虹梁を吊る、柱は立ち登らせ柱を多用する等、18世紀以降派手に装飾要素を多用する近世建築の特質をもつ先駆的作例である。造営の詳細な記録も残り、大工は長浜常喜村在住の宮部太兵衛、長浜近辺に多くの作品を残した彼の一統の作のうち、当堂は最も古く、確実な遺構となる。三

間四面系統の天台宗本堂としてはこの他玉泉寺本堂(虎姫町・安政～寛政)が重層という珍しい形をとり注目される。

浄土真宗寺院では湖北の西徳寺(木之本町) 元龍寺(浅井町) 常善寺(虎姫町) (いずれも17世紀中～後期)が古式な真宗本堂の例として既に知られている。今回類例として勝安寺本堂(高島町・17世紀後期)を加えた。常善寺本堂は五村別院(虎姫町) 現本堂の前身と伝える。両者は規模に差がありすぎ、寺格や寺勢の展開等と関連づけて真宗本堂の発展過程を捉え直す必要性を感じる。五村別院には享保年間から一連の工事で造営された本堂以下の諸建築が揃う。

曹洞宗では洞寿院(余呉町)が禅宗伽藍の形態をよく残す。門以外は幕末の建立である。全長寺本堂(余呉町・安政元年)は前に土間と広縁をもつ方丈形式の典型で上質である。

浄土宗寺院は県北半部には特記すべき遺構がなく、湖東に多い。日野町には信楽院本堂(元文4年)・常福寺本堂(18世紀中期)等、前面に一間幅の土間をもつ特異な浄土宗本堂がある。

時宗の浄信寺(木之本町)は庶民信仰の寺院としては珍しく整った伽藍をもつ。本堂(地藏堂・宝暦5年)は、貫を内陣側のみ虹梁形とし中備に多様な意匠を並べるいかにも近世的技巧をこらした佳作である。同阿弥陀堂(天保14年)は前面一間通を吹放ちとし、内部は浄土宗本堂に近い。建築年代は新しく技法的に見るべきものは少ないが、野棟木を始め支輪の裏板に至るまで寄進者の名が墨書され、時宗の特質をよく表わしている。

天台宗の一分派として明治になって一派を立てた天台真盛宗は念仏を重視する点で浄土宗に近い教義をもち本堂の内部構成も浄土宗に近い。本山の西教寺は近世の堂舎が整っており、本堂(元文4年)は内部の天井高が極めて高く、外陣に虹梁・海老虹梁・貫を多用した複雑な架構をかけ、須弥壇まわり斗拱には具象彫刻を用いる。極めて近世的な意匠の顕著な仏堂で、県下でも屈指の名建築である。江戸初期に盛安寺本堂(大津市・慶安5年)、江戸後期に真光寺本堂(志賀町・文化10年)があり真盛宗本堂の江戸時代内における変遷を知ることができる。

以上優れた作例をとりあげて概観した。2年にわたる調査で、神社については様々な形式、寺院では各宗派について届ることなく県下の近世社寺建築の概要を把握しえた。これらの建築の中世との関係・様式的特質・大工や生産組織等に関しては今後の研究課題であり、1985年度にこうした考察も含めた報告書を刊行する予定である。(山岸常人)

年代分布棟数

※各表いずれも調査棟数の内訳である。

世紀	15	16	17			18			19			20
			前	中	後	前	中	後	前	中	後	
神社	3	11	8	16	27	32	24	15	13	19	7	2
寺院	0	8	11	22	38	34	45	25	25	22	1	0

寺院宗派別件数

真言	天台	天台寺門	天台真盛	浄土	浄土真	時	日蓮	曹洞	臨	済	黄檗
10	16	3	7	22	53	2	1	14	9		3

寺社本殿種類別棟数

流		造	切妻造	入母屋造	春日造	複合社殿
一間社	三間社	その他				
61	52	4	8	13	6	1